研究ノート

「死」の報道にかかわるものの意識――インタビュー調査から

吉川　直人

Attitudes of those involved in the reporting of “death”: From the interview survey

Naoto Yoshikawa

死に関連するテーマは多岐にわたるため，報道には多様性がある。また，媒体による読者層の違いがある。煽情的に取り上げられる死もあれば，医療，哲学的な観点から学ぶ死もある。また，事故や災害，闘病などの遺族を取り上げる悲しむ死や感動する死もある。死のテーマを扱う記者等への調査を行い，死にかかわる報道を行う理由，留意点，印象深い取材経験などを明らかにした。記者等は，個別性に留意し，対象と向き合いながら，タブー視せずにテーマに向かい，読者の役に立つこと，参考になることを意識していることが伺えた。

キーワード：死のテーマ，命の現場，葬送の多様化

1. はじめに

本研究は，「死」にまつわる諸課題を取材，報道，配信を行っている記者等の語りと分析から構成されている。

死に関連する話題，報道は多岐に渡る。事件，事故等の報道から，医療，介護に関連した内容，終活，看取り，死生観等，一般紙，宗教，葬送専門紙といった報じられる媒体によっても変わってくる。また，東日本大震災やコロナ渦といった，天災，感染の多発という社会的事象の発生により報道も増える。また，多死社会という社会全体に波及する話題と絡めて死の話題が語られることがある。本稿では，死に関連する様々な話題や事象を含めて，「死」として表記する。

近年，死に関する話題と絡めて語られることの多い多死社会について触れる。総務省統計局の人口推計によると，2008 年を人口のピークとして，2011 年以降は一貫して人口が減少している。また，年齢階級別においては，0～14 歳人口および 15～64 歳人口は減少し，65 歳以上人口は若干の増加傾向にある。多死社会は，高齢者の増加により死亡者数が非常に多くなり，人口が少なくなっていく社会形態のこととされている[1)]。

多死社会においては，死にまつわる問題が顕在化することが予想されている[2)]。例として，人口減少の帰結としての多死社会であるため，終末期のケア，最後を迎える場所についての問題である。これらの問題について，どのように対処すればよいのか，模索が続いている。

多死社会をキーワードとした研究では，看取り，葬儀，弔いの変容，ケア人材の確保といったものが複数見受けられる[3)-5)]。多死社会というキーワードには，複数の論点が存在する。その論点とは，死の問題にどう備えるか，死を希望の場所で迎えることが出来るのか，そのために何が必要か等である。

多死社会と絡めて語られる死の諸問題は，年齢，心身の状態，その人の死別や病気の体験などにより，受け取る印象もまた変わってくる。死が身近でない時には，第三者の視点で死の話題を見ることがある。また，身近な人の死を経験したり，心身の衰えを感じるようになると，自らに近しい問題として死の話題をとらえる場合もある。

本稿では，死のテーマを扱う記者等への調査を行い，死にかかわる報道を行う理由，留意点，印象深い取材経験などを明らかにする。死に関連するテーマが多岐にわたるため，死にかかわる報道には多様性がある。また，媒体による読者層の違いがある。煽情的に取り上げられる死もあれば，医療，哲学的な観点から学ぶ死もある。また，事故や災害，闘病などの遺族を取り上げる悲しむ死や感動する死もある。死の報道の視聴者は，先入観や偏見から，死のタブー視により，報道から目を背けたり，煽情的な死にのみ興味を示す場合もある。取材，報道に関わる記者等が，どのような思いを抱えているかを調査することで，記事，映像等からなる死の報道の内面を探る。もって，死の報道の視聴者に参考となる材料を提供

京都女子大学発達教育学部教育学科養護・福祉教育学専攻

することで，発信者と視聴者の齟齬やズレの解消の一助となることを目指している。

今回の調査では，「死」を報道する理由，「死」を取材，報道する際に留意していること，印象深い取材，「死」の報道への思いの4つをキークエスチョンとして，インタビューを実施した，この4つは，死の報道に対する各人の立ち位置や問題意識があらわになる設問として選定した。

調査方法

死に関連する話題をテーマに取り上げている記者，ライター等を対象に，死のテーマを取り上げる際の留意点や多死社会へのアプローチなどを主要なキークエスチョンとして，半構造化インタビュー調査を行った。なお，調査は2022年4月にオンラインで実施した。インタビュー時間は60分から90分程度である。対象者の許可のもとで，インタビュー内容は録音し，データをトランスクリプションとし，言説分析を行った。

倫理的配慮

調査に当たって，京都女子大学臨床研究倫理迅速審査委員会の審査を受けて許可を得た。（許可番号2021-33）

2. インタビュー内容と分析

インタビューにより，なぜ死のテーマを取り上げるのか，死のテーマを取り上げる際の留意点等を聞きとり，意識を報告する。対象者は以下の表のとおりである。以下，傍線筆者。

1「死」を報道，発信する理由

死の報道，発信にかかわるものも，立場や役職，媒体の違いがある。そのため，死を報道する理由について，尋ねた結果を以下に示す。

死を報道する理由として，個人的な体験やキャリアから生み出された理由と，現在の所属組織による理由がある。前者は，最後の仕事としての意識やがん経験から見えた違和感であり，自ら進んで死の報道に関わる理由があるためである。後者は，所属する組織の中で，死の報道に関わることになり，報道の基本である命の現場，行政の死についての取り組みとして，かかわっているケースである。また，生きるヒントの発信，参考となる多様な死といった読者に伝えたいことを意識して携わる場合もある。

a 死後の世界，宗教への興味があり，自分の最後の仕事として行っている。携わる媒体によって書く内容は変わっていく。その中に，死に関わることとして，葬儀，供養，看取り，終活などが，書くテーマとして入ってくる。

a氏は，編集者を経て，現在は，フリーでジャーナリストを行っており，自分が携わる媒体の性格や読者層に合わせた記事を書くことを念頭にしている。a氏は，「唯物的な思考を持っていた」が，死後の世界や宗教への興味もあり，現在取り組んでいる葬送，終活に関するテーマの取材，報道を最後の仕事と自らに課している。宗教専門紙，一般紙のコーナー，WEB媒体など，読者層により，同じテーマであっても，ライトな記事，ディープな記事と求められる内容は異なる。媒体に合わせるという考え方から，a氏のスタンスが読み解けよう。死の報道に対して，雑誌，新聞，webメディアなど，媒体からの依頼によって取り上げる中身は変わる。根底には，自らの興味関心とキャリアの完成に向けた意識が伺える。

e 健康な人による，ターミナル期や難病者等に対するまなざし，発言を見ていて，自分ががんの経験があることから，死に触れてない人の言い分が，何か違うと思ったことが最初のモチベーションです。自分自身も偏った考え，極端な考えを持っていることも自覚できたので，その道の専門家，医師であれ，患者であれ，患者の支援者であれ，宗教家であれ，人に聞いて自分が学びながら，かつ，真剣に，自分事として，死や直面することを知ってもらいたい，も

表1 インタビュー対象者

対象者	職種	備考
a	終活・葬送ジャーナリスト	フリーランスとして，終活・葬送等に関連する情報を様々な媒体に発信している。
b	宗教専門紙主筆	宗教界の情報を発信する専門紙
c	新聞記者	地方新聞
d	行政職員	死生懇話会担当職員
e	がんサバイバーライター	本人ががんサバイバーであり，WEBメディア等に執筆している。

しくは考えてもらいたいのが一番ですね。決して，話題をさらうだとか，今，世の中でこれが話題になっているからではなく，一方的な取り上げられ方をされちゃたまらないなっていうのがあるので。一番は死んだら負けという考えに対する違和感です。

e氏のもつ，がん患者としての経験，思いと，死に触れていない人の考えのずれが，死の報道にかかわる出発点にある。自ら，各専門家などから学びたい考えも，動機である。健康な人，難病経験や差し迫った思いを抱えていない人を，死に触れてない人として表現している。それ違うだろう，という違和感については，当人も具体的に言語化しづらいとのことであった，それが，聞いて自分が学びながらにつながっていく。

a氏とe氏は，自らの興味関心，個人的な体験など，内部から湧き出るモチベーションが，死の報道へ向かわせている原動力である。

b 命の現場について報道するということは，報道の基本です。事件や事故で尊い命が奪われた，犠牲になることが起きれば，取材をし，報道をすることで，悲惨な事件，事故をなくしていく，再発防止に努めていく，あるいは遺族の悲しみに寄り添うというようなことは，報道の大前提としてあります。

命の現場に対して，事件，事故等による生死の境目と捉え，報道することが報道の基本としている。様々な報道がある中で，死にまつわる報道は選択されて行われるものではない。死は根幹の話題であるため，常にニュースバリューがある話題である。事件，事故，といった問題は，当事者の思い，発生時の背景を含めて報道される。それを命の現場として捉えている。

b メディアで死そのものを正面から取り上げるというのは，タブー視されているところです。ご遺体は映像をぼかしてますよね。これは，日本の放送コード，メディアの倫理上はご遺体というのは映さない。見せ，伝えてはいけないものというイメージがまだまだあって。死そのものを，正面から取り上げることが，なかなか難しかった状況というのはあります。それが，多死社会というものによって，だんだんと和らいできたというか，メディアでも死というものを正面に取り上げることによって，読者の考え方や生きるヒント，を考えていただく上で寄与する形ですね。

遺体を映さないというメディアのタブーは，根強いものがある。例えば，「事件や事故，災害などでは死者の尊厳や遺族の心情を傷つける遺体の映像は，原則として使用しない」NHK放送ガイドライン2020のように，自主的に規制を行っている。

遺体をぼかすなど，倫理上等の問題から直接の言及，報道を避ける話題でもある。多死社会による死の話題の増加が，死のタブーを和らげることは，多死社会による変化の一つであろう。

c 葬儀場を経由せずに，直接火葬場に行く直葬であったり，老人ホームの中で共同のお葬式を開いて，骨を納めてもらう施設葬であったり，葬送が非常に多様化してきた時代です。亡くなり方も多様，お墓の選び方も多様で広がり始めた，多様性を伝えたい。自分らしい死に方を模索している方の記事を，何度か取り上げました。死というのは誰にでも訪れるものであるので，誰かの死に方というのは，いつか必ず私たちの行く道であり，その参考になるんじゃないかな。

葬送の多様化に関する言及である。終活の一環として，お墓選び，葬儀の選定等がある。終活は，事務的な終わり方について考え計画することであるが，終活にも自分らしい死に方という死生観が反映される。多様な終わり方の発信が，読者の参考になることを意図している。

d 死生懇話会という取り組みを始めています。多死社会を迎えて人生100年と言われています。いかに豊かに生きるか。死が日常から切り離されてることから，死も捉えながら豊かに生きることに，行政としても取り組んでいきたい。

死生懇話会とは，滋賀県が，2020年度より始めている取り組みである。目的は，「多死社会を迎える中，行政も「死」について真正面から考えることで，限りある「生」をより一層充実させる施策につなげる契機とする」（死生懇話会 設置要綱）ことである。具体的には，有識者等を委員に据えて「「死」を捉えた「生」のあり方等について，様々な角度から議論・意見交換を行う」（死生懇話会 設置要綱）。

行政の新たな死に対するかかわり，取り組みである死生懇話会をベースとしての，発信である。YouTubeチャンネルや死生懇話会ホームページにおいて，死にまつわる諸課題にアプローチしている人のインタビューを不定

期に載せるなどの発信も行っている。

死を報道する理由として，個人的な体験やキャリアから生み出された理由と，現在の所属組織からなる理由がある。前者は，最後の仕事やがん経験から見えた違和感であり，自ら進んで死の報道に関わる理由がある。後者は，報道の基本である命の現場，行政の死についての取り組みである。所属する組織の中で，死の報道，発信に関わることになったことが理由である。

また，生きるヒントの発信，参考となる多様な死といった読者に伝えたいことを意識して携わる場合もある。

2「死」を取材，報道，発信する際に留意していること

死にまつわるテーマは，ネガティブさや，死に伴う苦しみ，暗さを伴うことが多い。取材の対象，報道の受け取り手に対しても，配慮が必要なことがある。死のテーマとの向き合い方に対しては，報道にかかわる者の，現在の所属先や取材対象により開きがある。死のテーマを，ひとからげにまとめてしまうことで，取りこぼされることがある。そのため，安易にしない，読者に考える余地を残す意識がある。また，死の話題の影響力として，遺族への影響，生に焦点をあてた死，いう意識がある。死にまつわる話題の特異性として，話題が多岐であること，痛みや苦しみ，悲しみが付きまとうこと，無数の考え方があること，根源的な価値観であることが上げられる。そのため，影響力に留意してより丁寧に扱うことが必要である。

e 安易にならないこと，分かりやすくしない。すっきり分かられるよりは悩んでもらったほうがいい。自分の考えとインタビューした相手，それが専門家であれ，患者さんであれ，相手の考えを自分の中で分けておくことです。

死に関する問題は，答えがなく，また人の数だけ答えがある。また，読者の状況の変化により考えも変わるだろう。悩み，対話し，自ら納得する過程も重要である。考える余地を作る，結論だけ伝えないことは，誠実さでもあろう。

d 死という，共通だけど，個人的なテーマを，行政で取り上げる際に，留意していることとして，死ばかりに焦点を当てるのではなくて，いかに豊かに生きるか，生，幸せに生きるっていうことのほうを考えられるようなものにしたい。個人的なことにも思えるような死生観について，行政がやることの意味，どう関われるのかということを，常に考えながら推し進めていく。どの生き方がいいとか，どんな死に方がいいとか，そういう考え方を押し付けるようなものにはしない。

行政が，死生観や死の対話に関わる新規の取り組みを行っているため，行政が関わる意味を常に問いかけている。また，行政の発信には，公的な影響力が強いため，考えの強制にならない配慮を念頭にしている。

c 報道一般に言えることですが，無理にしゃべらせない。ご遺族の方に，しゃべっていただかなくても結構ですよ，という取材上の配慮ですよね。他の取材と比べて，そう大きく変わるところっていうのはないですね。むしろ，われわれ，取材するほうがタブー視してはいけないな，そういう心積もりでやっているつもりです。

死というセンシティブなテーマに対して，直接，間接に目前に迫った人に対しての役割，影響を自覚して発信している。遺族等に対して，無理に聞き出さない配慮をしている。同時に過度の自粛を課さないことにも意識していることもポイントである。

a 死に関わる，終末期を迎えている方とかを直接取材するのではなく，それに携わってる専門家，業者，研究している人がメインの取材対象なので，死を扱うことに対する意識って，あまりないです。常に持っているのは，媒体の性格に合わして，いかに読まれて役立つかです。

終末期の当事者や遺族等ではなく，死にまつわる諸問題に対するアプローチを行っている人を主な取材対象としている。取材対象ではなく，読者に対して有用な記事を書く意識が伺える。

終活や葬送の専門紙に書く場合は，よりディープな内容を書けるが，一般紙のコーナーだとライトな内容を求められる場合もある。媒体により，読者層も求められるものも異なる。自らの書きたいものではなく，常に読者を意識していることが伺える。

3 印象深い取材

死の報道において，様々な取材現場，対象者と関わることがある。医療，介護で死の臨床現場においてケアに

あたる人，遺族の死者への思いといった場面に深い印象を受けた取材者がいる。また，死の臨床に向き合ってきた医師が，自らの死を迎える際の戸惑いに触れたことを，上げた人もいる。自らのがんサバイバー経験が，取材対象との距離間に与えた影響をあげた人もいた。共通していることは，取材対象である人との真摯な向き合い方である。

a 葬儀社の取材では，葬儀社のトップが対象ですと，ビジネス的な発想で，どうやったら売り上げが上がるかとか，利益が上がるかっていう取材が，メインになっちゃうんですね。だけど，医療，福祉等の現場へ行くと，看取りの対象の方とか葬儀の対象の方に対して，どう大切にするかっていう志。直接に死にゆく人たちに携わる人たちの，意識，思い，志を感じました。

d 人間の死に近いところを，体験された方，働いておられる方のお話は共通しているものがあり，いつも感銘を受けるんです。すごく人間を見ている，人間を変に分類しなくなっていると思います。生きて死ぬ。これが人の共通点で，後のことの差異は，すごく些末なことという感じで。いろんな人がいて，お互いをどう受け入れるか，どう認め合うかということを，すごく大事にされているのが印象的です。

死の臨床の現場に携わる人に対する取材への印象が語られている。臨床の場での死への向き合い方に対して，真摯さや志に深い印象を持っている。対比して葬儀社への取材ではビジネスの発想が多いことを述べている。死へのかかわり方の一つとして，葬儀周辺の産業があるが，ビジネス面の内容には，強い思いを感じていない。死に向かう人に対するケアに強い印象がある。

c 死が近い状況にあり，身辺整理の途中にある医師の取材です。講演録であるとか，自分が載った新聞記事であるとか，家族の迷惑にならないように，一つ一つ整理をしていかれたんですけども，その作業は，自分がこの世にいなかったようにする作業なんだっておっしゃっていて，それがすごく印象的でした。今日を輝いて生きるために死を考えるっていうのではなくて，明日，自分の身に訪れるかもしれない死を，どう受け止めるかということを20年以上，考えて，発信された方ですら，迷って，戸惑っていたんです。死に向き合い続けてきた方でも，最後は，そういうお気持ちになるんだなということが，本当に印象的でした。

医師への取材から受けた印象である。対象の医師は，様々な臨床に関わり，死に関する講演や著書も多数ある方である。死への向き合い方を発信してきた方も，当事者として死を迎える際にはゆらぎや，とまどいが全面に表れる場合がある。死が間近に迫ることにより，迷い，戸惑うリアルな現場であろう。

e 患者さんは，インタビューでは，やっぱり表向きの話をするんです。前向きに生きていますというような。それ以外，例えばインタビュー前とか後の雑談とか，オフレコーディングのときの話は違うんです。そんなに前向きでもなかったり。本当は1回だけのインタビューではなく，雑談などを重ねて，人となりを知ったうえで，記事に仕上げないと，その人に話を聞いたことを伝えることにならないなといつも思う。私ががんの経験があるため，「こういうことがあったんだ，だから話せるんだよ」って言ってくださることも多い。「親とかパートナーとかには，これは言えないんだけど，お医者さんにも言えないし」っていうことを話してくれたり，毎回，新鮮といえば新鮮。一つの記事に出てる一面だけでその人，出来上がってないっていうのは，いつも思います。

患者のインタビューにおいて，打ち解けない状態だと，「前向きに病に立ち向かう患者像」を演じることもあることに言及している。e氏はがんサバイバーのため，取材対象が心を開きやすい場合がある。難病当事者等，同種の経歴をもつ場合も，取材対象と打ち解ける要因となるが，対象と向きあうことが基本であろう。

4「死」の報道への思い

「死」の報道に対する思いとして，実名報道による生の物語，家庭での会話の参考となる死の報道，個別の政策と考える機会の提供の両輪，時代の雰囲気により発信を抑えるといった思いを聞き取れた。多様な報道に触れる中で，報道そのものの内容もさることながら，記事等を書く人，報じる人の迷いや戸惑い，葛藤に触れる節である。

b 今は，匿名報道がだんだんと主流になってきています。でも，亡くなった方は，例えば，（男性47歳）等の，匿名性，仮名，記号ではないんですよね。一

番個人の特徴を表すもの，その人の実体，その人が生きていた実感を表すものは，やはり，お名前だと思うんですよね。そのお名前を，こういう方がいたんだと，きちんと紹介していくことは，大前提にしたいなと思います。死者数だけで事件や事故の悲惨さを表すのではなく，その人の生きた物語といったものをちゃんと残していくために，実名が，報じる上で，一つの手段や捉え方になると思います。

報じる対象の実名を伝えることの効果について語られている。多死社会は死が増えることである。数字上の増減で語ることで覆い隠されるものは，個々人の生きた物語である。実名により，数字では伝わらない生死の中身について思いをはせることが出来るのではないだろうか。実名報道には，賛否があり，すべて実名にすることには議論があろう。しかし，記号と数字で流されない生きた言葉として届くことは，死の報道の効果となるのではないだろうか。

c 家族と，死の話とかお墓の話とかって，しにくいと思うんですよね。でも，そういうときに，記事をきっかけに，お墓の話どう？とか。もしがんになったら最後，家で死ぬっていうことについて，どう思う？とか，そういう家庭での会話，家庭でのアプローチに使ってもらえたらと思います。

死について，考え，身近な人と分かち合うことは，自らの死に向き合い，掘り下げることにつながる。ACPの重要性が叫ばれているが，行うためのハードルがあり，きっかけが必要なこともある。記事に書かれた等身大の，身近な死の物語がきっかけとなることもあるだろう。

e ※戦争が始まったこともあって，多くの人が波立っているときに，あんまり死について考えることを投下しないほうがいいと思っています。受け止め方が，ちょっとヒステリックになる時代の雰囲気があります。コロナがなかった時代よりも，死ぬわけにいかないとか死にたくない人の感情がすごい，とんがっている感じがしますね。なので，この時代に死を肯定的にという話はしづらい。死は生の続きで，一つの句点であるだけという考えだったけど，それも言えない。少なくともコロナで死ぬのは良くない結果，という流れですから。少なくとも記事で出すことはちょっと控えたほうがいいかな。なぜなら，読まれないと思うんです。アフターコロナ，ウィズコロナの今では。そういう意味で，死にまつわるとか死につながる病気の話等を肯定的に話しづらいですね。

※2022年ロシアウクライナ戦争

看取り，終末期ケアなど死にまつわる問題と議論は，死に関連する社会的事象が生じると，議題に上りやすく報道も活発となる。個々人が，自らの死，死生観を考えるきっかけとなるものとして，戦争とコロナが指摘されている。コロナによる予期せぬ死，理不尽な死，苦しみは，コロナがなかった時代よりも，死ぬわけにいかないとか死にたくない人の感情がすごい，とんがっている感じにつながる。戦争による死と破壊の報道と，それによる感情は，自らや大事な人の死や終末期について向き合い，考えることとイコールではない。しかし，破壊と苦しみの死の印象が強いと，死と向き合い。考えることは困難であろう。

3. おわりに

死の報道に関わる人の意識について，報道などに携わる人の言説から「死」を報道する理由，「死」を取材，報道する際に留意していること，印象深い取材，「死」の報道への思いの4つのテーマから，確認してきた。

「死」を報道する理由は，個人的な体験や思いから，自ら選んで行う場合と，配属された部署等によるものがある。いずれの場合でも，思いと覚悟が語られた。また，死というテーマを扱う際に，留意していることは，死にまつわる話題の特異性への意識である。死のテーマは，ネガティブさや，苦しみ，暗さを伴う。安易さも，過度なタブー視も避けられる。影響力に留意してより丁寧に扱うことが必要である。印象深い取材として，取材対象者からの印象が語られた。取材対象の死を迎えてのゆらぎ，想い等に強い印象を受けている。「死」の報道への思いとして，報道そのものの内容に加え，書く人，報じる人の迷いや戸惑い，葛藤がある。

記者等からの語りから，死を報道する中で，個別性に留意し，対象と向き合いながら，タブー視せずに向かい，読者の役に立つこと，参考になることを意識していることが伺えた。本研究では，報道，発信にかかわるものから，死の報道の内面の一部を伺うことができた。今後は，死の報道の受け取り手との意識調査や比較などにより，さらに研究をすすめることが課題である。

謝　辞

本稿は，科学科研費　基盤研究（C）「住民参加による日本型看取りのドゥーラ導入の課題と臨死期ケアの変

容について」課題番号 21K01952（研究代表者　林美枝子）令和３年度～令和６年度により実施した研究成果の一部である。ご協力いただいた方々にこの場を借りて感謝の意を伝えたい。

本稿は,『報道現場における「多死社会」という言葉―新聞記事の分析とインタビュー調査より―』と対になる論文である。

引用文献

1）知恵蔵 mini「多死社会」https://kotobank.jp/word/%E5%A4%9A%E6%AD%BB%E7%A4%BE%E4%BC%9A-192453（閲覧日：2022 年 11 月 1 日）
2）吉川直人：国内のデスカフェの現状と可能性 多死社会を支えるつながりの場の構築　京都女子大学生活福祉学科紀要　(15), 2020, pp39–44
3）槇村久子：超高齢多死社会における福祉と医療の看取りと葬送（1）養護老人ホーム・特別養護老人ホームと在宅の事例京都女子大学宗教•文化研究所, pp55–73
4）小笠原利枝, 福永ヒトミ, 井上智子, 藤田冬子, 渡邉眞理, 少子高齢多死社会を支える―専門看護師の真価を問う, 日本 CNS 看護学会誌　5(0), 2019, pp13–23
5）倉原宗孝：多死社会における施設内看取りに関する考察, 日本建築学会技術報告集　26(63), 2020, pp707–712

参考文献

上田正昭：死をみつめて生きる 日本人の自然観と死生観, KADOKAWA/ 角川学芸出版, 2012 年
加藤咄堂:死生観―史的諸相と武士道の立場, 書肆心水, 2006 年
金子隆一, 村木厚子, 宮本太郎：新時代からの挑戦状―少親多死社会をどう生きるか――一般財団法人 厚生労働統計協会 2018 年
小谷みどり：だれが墓を守るのか―多死・人口減少社会のなかで, 岩波書店, 2015 年
静岡新聞社静岡県の終活と葬儀 自分や家族のために 静岡新聞社 2022 年
総務省｜平成 28 年版 情報通信白書｜人口減少社会の到来 https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h28/html/nc111110.html（閲覧日:2022 年 11 月 1 日）
多死社会における仏教者の社会的責任, 宗教研究 91(Suppl), 2018, pp89–96
中日新聞社会部, 死を想え（メメント・モリ）！多死社会ニッポンの現場を歩く, ヘウレーカ, 2020 年
長岡美代：多死社会に備える：介護の未来と最期の選択, 平凡社, 2021 年
マリー・ムツキ モケット（著）高月 園子（翻訳）：死者が立ち止まる場所：日本人の死生観, 晶文社, 2016 年
無縁・多死社会（データでわかる日本の未来）, 洋泉社, 2010 年
横山奈緒枝：社会福祉士養成における葬送文化導入に関する一考察―多死社会の到来と弔いの変容における課題, 吉備国際大学研究紀要　(増刊), 2017, pp55–64
米田浩基:在宅医の告白「多死社会」のリアル, 幻冬舎, 2018 年